

## 特集にあたって

今野 浩 (中央大学)

本誌でファイナンスに関する特集が組まれるのは、この5年で今回が5回目になる。他のテーマに比べるとかなりの頻度である。因みに、過去4回のタイトルは

オプション理論とその周辺 (96年11月)

電子マネー (97年11月)

金融、証券ビジネスとOR (00年5月)

金融マーケティング (00年12月)

となっている。

しかし、編集部や執筆者諸氏の熱意にも拘わらず、これらの特集記事に目を通して下さる学会員がどれだけおられるかと考えると、にわかに元気が萎えてしまうのである。

さてファイナンス理論は、マーコピッツの昔からORの重要な応用分野だった筈である。しかし、わが国でこれがORの主要分野として認知されるようになったのは、ここ数年程度のことに過ぎない。ビッグバンの開始に伴う金融ビジネスの世界的大競争の中で、わが国の劣勢を挽回するには、工学的技術、中でもOR技術と数理、情報工学技術が中心を担うべきであるということが明らかになったからであろう。また勝ち組の米国においても、ここ数年ファイナンス分野におけるOR/MSのプレゼンスが目立っている。

思えばわれわれが、応用確率過程論、数理計画法、シミュレーション、いう三挺拳銃を手に、この分野に参入した80年代半ばを振り返ると、金融工学は（少なくともわが国では）全く未開の大陸であった。したがって、ORの専門家がこの分野に参入するには、拳銃一挺とちょっとした勇気さえあれば足りたのである。

そして、この分野に入りこんですぐ分かったことは、これ以上豊穡なORの応用分野は滅多にない、という事実であった。しかしそれにも拘わらず、OR学会員の参入はなかなか進まなかった。恐らく、エンジニア集団の中に根強く存在する“金融回避性向”の強さが

原因であろう。

実際、われわれは1988年以来、(中に2年の休みを挟んで)金融工学に関する研究部会をオーガナイズし、この分野の普及につとめてきたが、そこに参集する数十人の人々の中で、OR学会員が占める割合は、昔も今も僅か5%程度に過ぎない。部会に参加して下さる方々には、毎回学会への入会をお願いしているのであるが、残念なことに、金銭感覚を研ぎすました金融マン諸氏は、年間1万4千円の出費に値しないと考えているようである。

そうこうするうちに、この10年の間にこの分野には、数学、制御、物理などから多くの優秀な人材が流れこんだため、新規参入障壁はかなり高くなってしまった。しかしOR専門家ならやれる問題、あるいはOR専門家でなければやれない問題は、いままゴロゴロしている。若手研究者の参入を期待するや切なるものがあるという次第である。

さて今回の特集は、昨年の秋に実施されたOR学会のシンポジウム、“ORと金融工学”と、OR学会セミナー、“金融リスクとOR”の講演者に、そのときの発表の内容を一般読者向けに書き直し頂いたものである。執筆者はいずれも、OR学会におけるファイナンス研究の実力者揃いである。

一人でも多くの学会員の方々がこの特集をお読みになって、御自分の研究との接点を見出して下さることを願っている次第である。

なお、金融工学について総合的に勉強したいとお考えの方々は、エンジニア向けの金融工学教科書の決定版：

David G. Luenberger, Investment Science, Oxford University Press, 1998.

を御覧頂きたい(なお近々、日本経済新聞社からこの本の翻訳が出るということである)。